

## 【特集】 外国語教育のエッセンシャルミニマムについて

廣瀬 浩三・中井 誠一・西脇 宏

### 0. はじめに

『島根大学外国語教育センタージャーナル』第2号の特集記事として、外国語教育における「エッセンシャルミニマム」について取り上げる。紙面の都合上、英語及び初修外国語の「エッセンシャルミニマム」についての基本的な考え方を述べ、主として、その骨子を示すことを目的とする。

島根大学においては、平成16年の島根大学外国語教育センター発足と同時に外国語教育プログラムを一新し、実施しているが、そのプログラム内容を念頭に置きつつ、島根大学の学生の実情にあった「エッセンシャルミニマム」の策定を目指す。2007年には入学の定員数と受験生の数が同数となる、いわゆる大学ユニバーサルアクセスの時代を迎え、社会人入学者の数も増加して学生の多様化が進んでいるという状況変化の中、外国語教育がどうあるべきかを見出せるような、可能な限り一般性のある「エッセンシャルミニマム」を提案していきたい。

以下、「エッセンシャルミニマム」についての基本事項を廣瀬が執筆し、順に、英語教育については、中井、初修外国語については、西脇が分担執筆していく。

### 1. 大学教育改革とエッセンシャルミニマム - その背景と意義 -

「エッセンシャルミニマム」という用語が大学教育の表舞台に登場したのは、ごく最近のことである。国立大学が法人化するにあたって、中期目標・中期計画を策定することが義務づけられ、その策定要領が示されたが、その例示の中で「エッセンシャルミニマム」という用語が用いられ、各大学がそれを中期目標・中期計画に取り込むようになって、次第に広がりを見せていったと考えられる。しかしながら、「エッセンシャルミニマム」については、予めその概念にコンセンサスがあったわけではなく、具体的な策定作業に入って、「大学教育におけるエッセンシャルミニマムとは何ぞや」、「大学教育においてエッセンシャルミニマムを策定することに意義はあるのか」といった様々な物議が醸し出されたのである。

島根大学の中期目標・中期計画の中でも、「教育目的・目標に即して教育課程を編成し、体系的な授業内容を提供する」という中期目標に対して、「平成17年度末までに学部・学科では、それぞれの教育理念・教育目的を踏まえつつ、個々の授業科目の位置づけを明確にした一貫性・整合性のあるカリキュラムの再編成を行い、『大学教育開発センター』の下でそれらを調整する」という中期計画があり、その各年度計画の中で、各部局でその理念・目標に対応する「エッセンシャルミニマム」を策定し、カリキュラムに反映させていくこ

とが謳われている。さらに、将来大学全体が評価を受ける学位授与機構の評価への対応として大学が定める評価観点の中でも「エッセンシャルミニマム」と関連するものがあり、現時点で、その策定の是非について議論している段階ではなく、その具体的な策定が求められているのである。

以上のように、「エッセンシャルミニマム」の策定に関しては、外部的な要因もあったが、少し視点を変えて、「エッセンシャルミニマム」を一般的に定義し、「大学教育において最小限習得しなければならない教育内容を体系的にまとめたもの」と理解し、これらを整理し、それに沿ってカリキュラムを十分吟味し、各授業のシラバスを充実させつつ、教育内容を充実させていくことは、大いに意味があると考えられる。用語的には、「ミニマムエッセンシャルズ」(Minimum Essentials)と呼んだ方が正確なのかもしれない。

もう少し一般的な観点から「エッセンシャルミニマム」の意義を述べると、「エッセンシャルミニマム」を定めて、それを取り込んだ体系的な教育プログラムを構想することで、大学教育改革で求められてきた「単位の実質化」や「学生の質の保証」が可能となる。こうしたことは、個々の授業のシラバスの充実によって達成できるものであるが、それをさらに体系的にあるいは組織的に纏め上げたものが、「エッセンシャルミニマム」であると考えると分かりやすい。各部局では、それが最近の言葉でいうと「ディプロマポリシー」(Diploma Policy)と結びついたものとなり、大学院教育では、「課程」における教育内容を具体的に明示することに繋がる。さらに平たく言うと、中学・高等学校教育においては、文部科学省の定めた「学習指導要領」というものが存在するが、大学教育においては、画一的なものはその性格から存在し得ないが、各大学の理念・教育目標に沿って、その学習指導要領に匹敵するものを作成する必要性を考えれば、その意義が納得できる。

少し具体的に話を進めていこう。「エッセンシャルミニマム」の策定にあたっては、「どのような目標・目的の実現に対して「エッセンシャル」なのか、あるいは「ミニマム」なのかを明らかにしていかなければならない。

本特集で提示する「エッセンシャルミニマム」は、島根大学の外国語科目の「エッセンシャルミニマム」である。もう少し詳しく言うと、外国語教育センターが企画・運営・実施の責任母体となって、島根大学松江キャンパスで展開する教養教育の基礎科目として位置づけられる外国語科目の「エッセンシャルミニマム」である。

以下、英語及び初修外国語のそれぞれについて、島根大学の実情にあった「エッセンシャルミニマム」を提示すると共に、それぞれの外国語教育プログラムがどうあるべきかを示唆する枠組みを考察し、その骨子を示したい。なお、島根大学外国語教育センターにおいては、現在、更なる議論を進めているところであり、現時点での到達点を提示するのにとどまることを予めお断りしておきたい。

(廣瀬)

## 2. 英語教育プログラムの「エッセンシャルミニマム」

### 2.1. 島根大学外国語教育センターにおける英語教育の理念・目的及びその到達目標

外国語教育センターが実施する英語教育プログラムは、主として以下の3点を念頭に置き、その教育内容が構成されている。

#### (1) 国際共通語として必要な英語のコミュニケーション能力の向上を図る。

従来の英語教育では、読む、書く、聞く、話すの4技能のうち、英語の受信型能力として読解力を養成することに重点が置かれてきた。しかし、国内外における急速な国際化とグローバル化が進む中で、日本人が世界において果たすべき役割が飛躍的に増加し、その社会的貢献の基礎となる世界の共通語である英語を生きた言語として身につけ、様々な情報を受容するだけでなく、自ら発信していく必要性が近年とみに増大してきている。このように、「使える英語」の修得を目指す教育内容を提供していく必要がある。

#### (2) 外部試験の利用やメニュー方式によって社会や学生ニーズに応える英語教育の実施。

社会や学生ニーズに応え、TOEICを教育内容に盛り込み、その対応訓練を行いつつ、英語の基礎的読解能力及び運用能力を向上させていく方向が望ましいと考えられる。TOEICは、そのスコアにより、学習者自身はその到達度を客観的に知ることができ、さらに語学学習の基本である学習者が主体的に学ぶ態度も身につけさせることができる。また同時に、教育成果も明確となる。さらに、これまでの英語教育の実績を踏まえて、学生の興味関心、目的に従うメニュー選択方式を継承し、実践的に情報発信していくための聴解力、会話力、作文力を向上させていくようなカリキュラムも必要であろう。

#### (3) 国際感覚を養い、知性の伸展の一助となる英語教育の実施。

他方、島根大学の外国語教育は教養教育基礎教育科目として位置づけられることを踏まえ、大学における専門教育及び大学教育終了後生涯にわたって基盤となる教育内容を提供する必要がある。すなわち、技能としての英語知識を教授することのみならず、英語の習得過程において、観察能力、分類・分析能力、演繹能力など、さまざまな知的訓練を行うことができ、多様な国民の歴史、風俗、伝統、価値観など幅広く異文化を理解し、国際感覚を養っていくことができるという視点も見失ってはいけない。さらに、英語教育の長期的な成果として、自らを英語という鏡に映しだし、日本語、日本人の思考法、日本文化の理解も深めることが期待でき、英語学習者がさまざまな分野で国際社会に貢献するための人間形成ならびに知性の伸展の一助となる教育を目指すべきである。

## (到達目標)

到達目標としては、現代グローバル社会を生き抜いていく上で必要とされる英語の基礎力の習得があげられる。特に実践的な英語能力を重視し、英語によって最小限のコミュニケーションができる英語運用能力の習得を目指す。また、TOEIC 等の外部試験に対応できるスキルの習得も併せて行う。

当面の具体的数値目標としては、TOEIC (IP を含む) スコア 300 点以上を全員の必須点とし、各人が入学時と英語教育プログラム学習後の TOEIC (IP を含む) のスコアを比較して、平均 50 点伸びることを目指す。

## 2.2. 英語エッセンシャルミニマムの考え方

島根大学外国語教育センターの英語では、英語エッセンシャルミニマム策定ワーキンググループを設け、6月から10月にかけて英語エッセンシャルミニマムについての討議を5回行った。授業や日常の業務に忙殺されながら限られた時間内での議論であり、今後も継続的に論議・修正を続けていくという総意の下に、英語エッセンシャルミニマムについて以下のような考え方を示した。

### 2.2.1. 英語エッセンシャルミニマムの必要性について

平成16年度の国立大学法人化以前、島根大学の英語教養教育は、法文学部が責任母体となり全学に展開されていた。その間に、国際化の進展に対処できる外国語運用能力・コミュニケーション能力などの向上を目指して改善の努力が積み重ねられ、TOEIC や TOEFL、英検などの外部試験に基づく単位認定制度も導入された。しかし、非常勤教員も含めた英語教員個々の裁量による英語教育には限界もまた指摘されていた。一つには、使用するテキストや成績評価が個々の教員の主体に任されていたために、やや統一性に欠けていたことが挙げられる。また、評価方法自体の妥当性・透明性といった点に関する学生側の不満も時に見受けられた。

法人化と共に発足した外国語教育センターはその設置構想の段階から、こうした点を是正する「公正で透明性の高い厳正な成績評価」が設置効果の一つとして掲げられていた。それは TOEIC-IP テストを使った外部英語能力試験の導入、学内統一試験の実施、レベル毎の統一小テストなどに結実し、現在の外国語教育センター英語教育プログラムの重要な柱となっている。そしてそれはまた、総合理工学部や生物資源科学部の一部で実施されている JABEE 認定にも対応できる厳正な成績評価である。

しかし成績評価の統一性・透明性を確保した一方で、もう一つの重要な要素であるコンテンツの問題が残されている。それは島根大学の学生に対してどのような英語教育プログラムが最も相応しいのかという問題である。センター発足以前には統一教材といっ

た発想自体がなかったため、実際のところ島根大学の学生の総体的な英語能力に関して、教員の側が厳密に把握をしているとは言い難かったというのが実情であろう。発足当時のコンテンツもそれ故、各教員の個々の認識の総体とでもいったものであったが、実際に外部試験を導入し、統一教材による統一テストを実施していく過程でその全貌が浮かび上がってきた。そしてそれは良くも悪しくも我々英語教員がきちんと認識し、プログラム実施に際して最重要視しなければならない情報なのである。

こうして学生の英語能力に関する全体像を把握し、それに最も合致する英語教育プログラムを策定する際に当然必要とされるのが、限られた必修の授業の中で何をどれだけ教えるのかという問題である。確かにエッセンシャルミニマムには外在的な要因があったとはいえ、実際には島根大学外国語教育センターが企画・運営・実施しているような統一的教育プログラムには必須の要素だと言って過言ではない。もしそれが実情と乖離すれば、個々の教員が自らの経験と認識によって行っていた従来型の英語教育よりさらに、学生にとっても教員にとっても不幸な事態を招くことになると思われるからである。

### 2.2.2. 英語エッセンシャルミニマムの定義について

大学における英語教育エッセンシャルミニマムを定義することは容易ではない。大学では高等学校の「学習指導要領」のような全国一律の学習指針が存在しないが、作成しようとしても、中学・高校の6年間の学習を経た時点の英語能力において大学間で歴然と差があるために統一的な基準を設定することは不可能といってもよい。そしてそれはそのまま英語エッセンシャルミニマムの定義の困難を示している。「外国語教育のエッセンシャルミニマム」の項で述べられているように、エッセンシャルミニマムを「大学教育において最小限度習得しなければならない教育内容を体系的にまとめたもの」と理解するにしても、新入生の大部分が初めて接する初修外国語とは違って、英語に関しては結局各大学において「最小限度」の内容自体が大きく異なるからである。必然的に英語エッセンシャルミニマムの策定は各大学の事情に基づいた個別のものにならざるをえない。

また学生間の英語能力の格差は実は同一の大学内でもある。島根大学では、松江キャンパスの新入生が入学直後の4月と10ヶ月後の2月にTOEIC-IPテストを2回受験しているが、2006年2月のテスト結果では、学部ごとの平均点においてそれぞれ最高と最低の差が約90点あった。<sup>1</sup>

このような状況の中では、大学全体の統一的な英語エッセンシャルミニマムを策定し、それに基づいて授業計画を立てることは非効率なだけでなく、一部の学生には授業を退

---

<sup>1</sup> 『外国語教育センタージャーナル』創刊号、島根大学外国語教育センター編、2005年、15頁

屈にし、一部の学生には過度の負担をかけるという弊害すら生みかねない。島根大学外国語教育センターでは、こうした要因に鑑み、全学生の英語能力のレベルを、基礎段階のレベル1からレベル2、レベル3へと三段階に区分した上で、「各レベルに応じて最小限度習得しなければならない教育内容」を島根大学の英語エッセンシャルミニマムとすることとし、英語授業プログラムをそれらに基づいて構想することとした。

### 2.2.3 英語エッセンシャルミニマムの内容について

現在外国語教育センターでは、前述のように、英語によって最小限のコミュニケーションができる英語運用能力を身につけることを「到達目標」としている。当面の具体的な数値目標としては TOEIC のスコア 300 点以上が 1 年次全員の必須点となっており、入学時と 1 年次プログラム終了後のスコアを比較して、平均 50 点伸びる教育を目指している。エッセンシャルミニマムはこれとは別の観点から捉えるべきかという議論もあったが、到達目標を TOEIC スコアで設定している限り、全く切り離して考えることは意味がないだけでなく、不合理であるという結論に至った。ゆえに到達目標と照応する形で、2 年前期の必修終了時までに最低限習得すべき英語エッセンシャルミニマムのレベル分けの具体的な目安として、当面は TOEIC のスコアを利用することにした。もちろん、英語の 4 技能（読む、書く、聞く、話す）を習得する上で、スピーキングやライティングが課せられておらず、内容がビジネス英語に偏りがちな TOEIC が、大学生の英語能力を計る十全のテストであるとはいえないが、現状では有効な尺度の一つであり、外国語教育センターのプログラムにとっては最も利用価値の高いテストといえる。

具体的な数値としては、レベル1を350点、レベル2を450点、レベル3を550点とそれぞれ設定し、そのレベルに応じた教育内容を策定する。下に引用した「TOEIC レベルとコミュニケーション能力との相関表」で見ると、「C」から「B」のレベルに相当する数値である。

TOEIC レベルとコミュニケーション能力との相関表

(参考) Proficiency Scale

レベル	TOEIC スコア	評価（ガイドライン）
B	730	どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている。通常会話は完全に理解でき、応答もはやい。話題が特定分野にわたっても、対応できる力を持っている。業務上も大きな支障はない。正確さ・流暢さに個人差があり、文法・構文上の誤りが見受けられる場合もあるが、意思疎通を妨げるほどではない。

C	470	日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。通常会話であれば、要点を理解し、応答にも支障はない。複雑な場面における的確な対応や意思疎通になると、差が見られる。基本的な文法・構文はみについており、表現力の不足はあっても、ともかく自己の意志を伝える語彙を備えている。
D	220	通常会話で最低限のコミュニケーションができる。ゆっくり話してもらおうか、繰り返し言い換えをしてもらえば、簡単な会話はすることができる。身近な話題であれば応答も可能である。語彙・文法・構文ともに不十分なところが多いが、相手が Non-Native に特別な配慮をしてくれる場合には、意思疎通を図ることができる。

(資料: 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会)

レベル1の350点という数値は990点満点からすれば低いように思えるが、1999年に行われたある調査では日本の大学1年生の平均点となっている。それによると「TOEIC 350点は下から2番目の壁で、ここを突破できれば、基礎はある程度固まっているという」<sup>2</sup> 段階だとされている。ただ当然ながら、それは島根大学における英語教育の最終目標ではなく、むしろそこから大学在学中に更なる英語能力を獲得していくための立脚点としての段階と捉えるべきであろう。

以下、エッセンシャルミニマムとして、これらのレベル毎に設定したスコアを達成するためにどの程度の英語力が必要かを想定した。また先述したように、スピーキングとライティングに関してはTOEICでは問われないので、相関表の「評価(ガイドライン)」に相当する内容を独自に策定した。以下、レベル1を基本的枠組みとしながら、それに付加する形で各レベルの具体的なエッセンシャルミニマムを示す。

### 2.3. 英語エッセンシャルミニマムの骨子

以下エッセンシャルミニマムの骨子を述べていくが、最初に、すべての項目に共通の要素となる語彙・発音・文法に関して記述し、その後にリーディング・ライティング・リスニング・スピーキングの順にスキル毎に取り上げていく。そして最後に英語学習の背景知識として英語圏の文化について述べる。

<sup>2</sup> 『TOEIC テストへはじめて挑戦! まずは350点』千田潤一・鹿野晴夫・足立洋・水島孝司、明日香出版社、2000年、9頁

## 【語彙】

語彙はすべての外国語学習の基本となるものだが、最近の言語研究においては以前に増して語彙の重要性が指摘されている。<sup>3</sup> しかし高校までの獲得語彙数が適切でなかった基礎レベルの学生に対して急激な語彙の増加を求めるのは実情に合わない。また以下で述べるリーディングやリスニングの技能にも対応し、通常会話での最低限のコミュニケーションを行う能力に相当する語彙数を設定することが必要である。総数としては、熟語を含め、5000語を想定している。

レベル1	英語基本単語	2000語	英語基本熟語	500
レベル2	英語活用単語	1000語	英語活用熟語	250
レベル3	英語応用単語	1000語	英語応用熟語	250

## 【発音】

発音は厳密に言えば独立して設定すべき項目ではなく、リスニングやスピーキングの知識・技能に含まれるかも知れないが、ここでは重複をさけるため一括して扱うことにする。英語のグローバル化に伴い様々な外国語の影響を受け共通語化した現状では従来ほど米英人の発話を正確に模倣する必要性は薄れているが、各レベルに応じて必要最低限の発音に関する知識は習得しなければならない。

### レベル1

- ・英語の母音に関する知識
- ・英語の子音に関する知識
- ・音節の区切りに関する知識
- ・日本人が特に注意すべき発音のポイント（特にbとv、rとlの区別、thの音など）

### レベル2

- ・英語の発音と綴りとの関係について（同じ綴りで異なる発音、黙字など）
- ・リエゾンに関する知識（call upなどの句で子音と母音がつながる発音など）

### レベル3

- ・難解な発音、特に変化音に関する知識

## 【文法】

文法は従来同様外国語教育における最重要項目の一つである。英語の4技能（読む、書く、聞く、話す）を習得する上で、各レベルに応じて必要最低限の文法に関する知識を習得しなければならない。

レベル1 比較的平易な英語を理解に必要とされる文法的知識

<sup>3</sup> 『JACET8000 英単語』相澤一美，石川慎一郎，村田年，桐原書店，2005年，2頁

- ・各品詞（名詞・形容詞・動詞等）に関する基本的知識
- ・句と節の基本的知識
- ・主部と述部の基本的知識
- ・文型に関する基本的知識
- ・時制に関する基本的知識
- ・不定詞・動名詞・分詞の用法に関する基本的知識
- ・接続詞に関する基本的知識
- ・関係詞の基本的用法に関する基本的知識
- ・仮定法の基本的用法に関する基本的知識
- ・比較の基本的用法に関する基本的知識
- ・英語構文に関する基本的知識

#### レベル2 レベル1の文法的知識を補う学習英文法的知識

上記の各項目について、一步進んだ文法知識となるが、具体的には、以下のような内容が考えられる。

- ・可算・不可算名詞の使い分けに関する知識
- ・不定冠詞・定冠詞の使い分けに関する知識
- ・代名詞の種類や詳細な用法に関する知識
- ・数詞や数量形容詞などの用法に関する知識
- ・時制の使い分けに関する知識
- ・法助動詞の詳細な用法に関する知識
- ・前置詞の詳細な用法に関する知識
- ・様々な否定表現に関する知識
- ・ その他

また、特に、修飾関係をきちんと理解するための文法的知識が重要となる。

- ・前位修飾関係に関する知識
- ・後位修飾関係に関する知識

#### レベル3 さらに高度な英語を理解するための文法的知識

- ・話法に関する知識
- ・倒置や強調に関する知識
- ・同格や挿入に関する知識
- ・複合関係詞の用法に関する知識
- ・英語の特殊構文に関する知識
- ・その他

## 【リーディング】

リーディングは学生にとっては比較的取り組みやすいものに思われるが、現状では未だにいわゆる英文解釈から抜け出していないものが多い。外国語教育センターの英語教育プログラムのリーディングで最も重視するのは速読と多読である。そのために、各レベルに応じて、英文の内容を大まかに掴んで読み進めていく必要最低限の英語リーディング能力に関する知識・技能を習得しなければならない。

### レベル1

- ・スキミング(ざっと読み)・スキヤニング(拾い読み)に関する知識
- ・英文パラグラフの大まかな構成(トピックセンテンス等)に関する知識
- ・語彙2,000語程度の平易な英文を英語の流れに沿った読み方ができる
- ・語彙2,000語程度の平易な英文を意味の纏まりごとに把握する読み方ができる

### レベル2

- ・英文パラグラフの構成及びその特徴に関する知識
- ・英文パッセージの構成及びその特徴について(トピックライン等)に関する知識
- ・語彙3,000語程度の英文を英語の流れに沿った読み方ができる
- ・語彙3,000語程度の英文を意味のまとまりごとに把握していく読み方ができる

### レベル3

- ・トピックセンテンスやトピックラインを理解しながら読み進めることができる
- ・語彙4,000語程度の英文を意味の流れに沿った読み方ができる
- ・語彙4,000語程度の英文を意味のまとまりごとに把握していく読み方ができる

## 【ライティング】

ライティングは実際にはきちんと単語を綴れることや、意味のある文を構成することができなければならないので、語彙や文法との関連性が強い。また手紙やエッセイといったレイアウトの種類や基本的な句読法の知識も必要になる。さらにコンピューターによるコミュニケーションという現代的な要請にも答える、必要最低限のライティング能力に関する知識・技能を、各レベルに応じて習得しなければならない。

### レベル1

- ・基本的な文構成(パラグラフやトピックセンテンスを含む)、手紙の形式などの知識
- ・レイアウト、書記法、句読法(ピリオド、コンマ、コロンなど)の知識
- ・ライティングに役立つ基本的英語構文・表現に関する知識
- ・自己紹介文、簡単なEメール、簡単なエッセイが英語で書ける

### レベル2

- ・手紙文、Eメールで用いる英語表現に関する知識
- ・平易なビジネス文書(注文、Faxなど)、手紙、エッセイが英語で書ける

### レベル3

- ・自己の専攻に関する詳しい内容，議論が英語で書ける

## 【リスニング】

近年の中学・高校における実践的英語教育法の進展と LL 教室の拡充により，学生のリスニング能力は以前に比べ上昇したと思えるが，ナチュラルスピードにはまだまだ対応できないのが現状である。島根大学の英語教育プログラムでは多聴を基本としている。できるだけ英語の音声に慣れさせ，できるだけ自然な速度による聴解を達成するため，各レベルに応じて必要最低限のリスニング能力に関する知識・技能を習得しなければならない。

### レベル1

- ・簡単な文の種類とイントネーションの関係に関する知識
- ・スローレベル（1分間100語レベル）の英語を聞いて理解できる

### レベル2

- ・英語のリエゾンについて（同化現象，縮約現象，脱落現象等）の知識
- ・リピージング（繰り返し）についての知識
- ・ノーマルレベル（1分間150語レベル）の英語を聞いて理解できる

### レベル3

- ・シャドーイング（即時的な繰り返し）についての知識
- ・ファーストレベル（1分間180～200語レベル）の英語を聞いて理解できる
- ・簡単なリピージングができる

## 【スピーキング】

英語を学ぶ学生の要求が最も高く，またそれゆえに最も達成度が低いのがスピーキングといえるかもしれない。ライティングほど，語彙や文法に縛られないが，内容を的確に伝えるための表現や基本的なレトリックを身につける必要がある。またコミュニケーション能力それ自体の向上を授業を通じて獲得していく努力も必要である。各レベルに応じて必要最低限のスピーキング能力に関する知識・技能を習得しなければならない。

### レベル1

- ・機能別英会話基本表現（挨拶，感謝・謝罪表現，依頼表現など）の知識
- ・使用頻度の高い会話フレーズに関する知識
- ・自己紹介（氏名，家族，趣味など），簡単な質疑応答を英語で行うことができる

### レベル2

- ・機能別英会話発展表現（電話対応，交渉など）の知識
- ・専攻に関する詳しい紹介，社会状況に関する説明を英語で行うことができる

### レベル3

- ・ 社交的英会話表現（社会的事項，日本と英米の文化比較など）の知識
- ・ 協議ための言葉（negotiation language）の知識
- ・ 簡単な議論，交渉が英語で行える

### 【英語圏の文化】

文化や風習を知らずしてその国の言語を学ぶことはできない。「言語は文化」という謂いがあるように，文化・風習はその言語と強い相関関係にある。日本語で挨拶を交わすのに頭を下げる動作が伴わなければ総合的な意味での「会話」が成立しないように，英語を学ぶ際にも必要最低限の英語圏の文化に関する知識・技能を習得しなければならない。また，その知識の内容もレベルが上がるにつれてより深いものになる必要がある。

#### レベル1

- ・ 英米の地理・歴史・習慣・現代社会事情に関する基礎知識
- ・ 英米人の国民性（マナーを含む）に関する基礎知識

#### レベル2

- ・ 日本と英米の文化比較の知識

#### レベル3

- ・ 英米の文化についての議論ができる

## 2.4. 英語エッセンシャルミニマムの今後の展開

以上，島根大学外国語教育センターが実施する英語教育プログラムにおいて習得すべき各レベル毎のエッセンシャルミニマムを列挙してきたが，これはあくまでその骨子であると同時に，現段階におけるいわば中間報告に過ぎない。エッセンシャルミニマム策定の作業自体が，変化していく社会情勢や学生の質を顧慮しながら，しかし時勢に押し流されないスタンスを保ちつつ，改訂していくべきものとするからである。英語教育プログラムの理念・目標は普遍的な側面があるが，その具体的到達目標については学生の動向も考慮し，変更の余地があり，それに応じてエッセンシャルミニマムの内容も微妙な修正が行なわれることになるかも知れない。そして，大きな作業として，具体的な英語教育のコンテンツ作成が残っている。こうした策定作業を繰り返す努力の過程で，英語教育プログラムの骨格となる普遍的な要素もより明確に見えてくるものと期待している。

エッセンシャルミニマムの策定はまた，先述したように，究極的には島根大学の学生にとって最も相応しい最も効果的な英語プログラムはどのようなものかを模索することである。将来的にはこうした成果をまとめ，島根大学独自の英語テキスト作成へと繋げていきたいと考えている。

（中井）

### 3. 初修外国語教育プログラムの「エッセシャルミニマム」について

島根大学外国語教育センター初修外国語教員スタッフ（常勤教員，特別嘱託講師）は，平成18年4月，5月の2ヵ月にわたって毎週ミーティングを行い，島根大学における初修外国語教育のエッセシャルミニマムについて集中的に議論し，その共通枠組みを決定した。4外国語が開講されている島根大学初修外国語で，それらの外国語すべてに共通の枠組みについて合意，決定できたことは，ひとえに教員スタッフ全員の協力の賜物であり，その枠組みに基づく今後の成果については，島根大学で学ぶ学生たちの共有財産となるはずのものである。

ここでは，大学における初修外国語教育になぜエッセシャルミニマムが必要なのかについて，島根大学のケースを紹介し，活発に行われた建設的議論を経て合意された島根大学初修外国語エッセシャルミニマムの共通枠組みについて，その合意事項の全文を紹介しながら，若干のコメントを付記することとしたい。

小さな地方大学であればこそ可能であったわれわれのささやかな試みが，初修外国語教育改善のための一参考資料となり，教育改革の輪が少しでも広がることを期待している。

#### 3.1. 大学における初修外国語教育にエッセシャルミニマムはなぜ必要か

エッセシャルミニマム策定の要請は，多分に外在的なものでもあろうが，以下においては，島根大学の教育実践の場から浮上してきた，われわれにとっての内在的必然性に限って述べるにとどめたい。

法人化後の旧国立大学の教育改革最大のキーワードは 私見によれば，「教育への組織的取り組み」ということであろう。事前審査から事後評価へと，日本の評価システムが大きく転換しつつある今，入学後にどのような教育を行い，どのような卒業生を社会に送り出すかにより大学が評価される，すなわち，大学の組織的教育力が問われる時代となったのである。

法人化と同時に，英語のみならず初修外国語をも含む外国語教育に専ら従事する教員組織，外国語教育センターを設置した島根大学は，外国語教育に関して，いち早く組織的教育のための体制を整えた。さらには，外国語教育センターのセンター長を，法人の理事でもある教育担当副学長としたことは，教育に重点をおく大学として進むべき方向に，明確な意思表示を内外に示すものであったとも言えるであろう。

外国語教育センター設置以降，初修外国語に関しても，組織的教育という観点から，さまざま改革をおこなってきたが，その一つに，成績評価基準の統一が挙げられる。外国語教育センターが設置された平成16年度以降，すべての初修外国語の授業は，同一の評価基準で成績の判定が行われている。成績評価の厳正化，透明化，公平化は，組織的教育の要とも言える重点的改革であり，その中でも，成績評価の公平化は，島根大学における

初修外国語が選択必修科目であるだけに、とりわけ重要である。選択した外国語・クラスによって単位修得に大きな難易の差があり、そのことに学生が不公平感をいだくことがあってはならないのである。学生に履修を強制する以上、成績評価の公平性確保は、必修科目の義務であろう。

しかしながら、センターが独自に実施している学生アンケートの自由記述では、相変わらず外国語やクラスによる難易度の差が、毎回、複数指摘されていた。これを改善すべくわれわれは、平成17年度の成績評価状況を自己点検することとした。外国語別の結果は次表のとおりである。

外国語	優	良	可	不可	未修	修得	未修得	合計
ドイツ語	39.5%	28.8%	18.5%	5.5%	7.7%	86.8%	13.2%	100%
フランス語	43.1%	31.4%	12.2%	3.6%	9.7%	86.7%	13.3%	100%
中国語	58.5%	19.7%	11.8%	1.3%	8.7%	90.0%	10.0%	100%
韓国・朝鮮語	50.5%	21.1%	13.5%	2.1%	12.7%	85.2%	14.8%	100%
初修外国語	48.6%	24.1%	14.4%	3.1%	9.7%	87.2%	12.8%	100%

単位の未修得率に関しては、最大値の韓国・朝鮮語と最小値の中国語との格差は4.8パーセントで、5パーセント以内に収まっており、成績評価基準の統一が一定の成果を挙げていると評価できよう。授業アンケートにおける一部学生の指摘は、おそらくはアンケート実施のタイミングとも関係があると推測される。センター独自アンケートは期末試験開始直前に行っており、その時点で単位修得に困難を感じていた学生も、結果的にはその大部分が単位履修できたものと思われる。

しかしながら、一方で優の比率を見ると、最大値の中国語と最小値のドイツ語との間には、実に19パーセントの開きが生じている。単位修得の難易に関しては、さほどの大差はないが、優の取りやすさという点では、看過できない大きな開きがあることが分かる。

さらに、次表の教員別集計を見ると、問題の所在はより明確となる。

外国語	教員名	優	良	可	不可	未修	総計
G	1	30.7%	31.4%	21.4%	5.9%	10.6%	100%
	2	53.7%	19.0%	14.6%	6.7%	6.0%	100%
	3	30.0%	34.3%	18.6%	7.1%	10.0%	100%
	4	27.7%	34.5%	26.4%	4.7%	6.8%	100%
		48.1%	30.4%	13.1%	3.4%	5.1%	100%
F	1	38.7%	30.1%	15.6%	4.8%	10.8%	100%
		47.7%	32.8%	8.6%	2.3%	8.6%	100%

C		57.3%	19.6%	12.8%	0.4%	9.9%	100%
		53.7%	22.0%	12.9%	1.8%	9.6%	100%
	(1)	81.1%	11.7%	3.6%	3.6%	0.0%	100%
K		49.8%	19.0%	14.1%	2.7%	14.3%	100%
		45.2%	23.4%	14.6%	2.2%	14.6%	100%
	(1)	68.3%	22.1%	8.3%	0.0%	1.4%	100%
初修全体		48.6%	24.1%	14.4%	3.1%	9.7%	100%

外国語はアルファベットで、教員名は数字で表した。通常の算用数字が常勤、丸つき数字が特別嘱託講師、カッコつき数字が通常の嘱託講師を表す。

教員別に集計すると、優の比率に関して、常勤<特別嘱託講師<通常の嘱託講師という明確な序列があることが分かる。(G2のみ例外。)これは年間を通しての集計であり、通常の嘱託講師も複数クラスを担当していることを考慮すれば、C(1)の未修、K(1)の不可0パーセントは、演習授業である外国語では実際上あり得ない数字であり、授業担当しかしない通常の嘱託講師(非常勤講師)を組織的教育に組み入れることにはやはり無理があることが判明した。この結果を受けた改善策としてわれわれは、平成19年度より、常勤および準常勤扱いの特別嘱託講師のみからなる教員スタッフ構成をとることとした。法人化以降、島根大学では教員人件費は予算セグメントごとの自主管理へと変更され、このような自主的改善を迅速に実施することが可能となった。

集計結果は各教員にフィードバックされたが、常勤教員より、厳正な評価を行っている教員が、学生アンケートでの評価や外国語・クラスの選択で不利益を被るのは避けるべきではないか、成績評価に関して一定の目安を設定すべきではないか、などの反応が示された。実際に単位未修得率約12パーセント、中間・期末試験の平均点約70点で、シミュレーションを行ったところ、優、良、可はほぼ同率となるとの結果も出ていた。しかしながら、大学における成績評価は本来絶対評価であるべきで、前もって成績評価に一定の割合を設定することは本末転倒である。到達目標に照らして、授業内容が外国語ごとに不統一であり、そのことが評価に反映しているのであれば、真っ先に取り組むべきなのは、むしろ、そのばらつきを改善することであろう。

外国語教育センターが発足した平成16年度は、新しい教育理念・目標に基づく教育プログラムの基本設定に、平成17年度は一挙に6名の特別嘱託講師を迎えて、そのプログラムの着実な実施に、それぞれ最大限の努力を払ってきたが、プログラムの中身そのものである「何を、どこまで教えるか」という教育内容の初修外国語全体での共有化が、以上述べた成績評価状況の自己点検の結果として、いよいよわれわれの喫緊の課題となったのである。

最低限、何を、どこまで習得させるか、これはまさにエッセンシャルミニマムそのものであるが、文字を覚えることから始めなければならない外国語があるなど、初修外国語そ

それぞれの学習事情は異なっており、それを無視した画一的、機械的内容設定はほとんど意味を持たない。われわれが組織的に取り組めるのは、その共通枠組みの設定に限られるのである。

### 3.2. 島根大学初修外国語エッセンシャルミニマムの共通枠組み

エッセンシャルミニマムをめぐって計5回行われたミーティングは、文書化された前回の内容を全員で確認したうえで、議論を進め、最終的に以下の合意にいたった。10ポイントの部分が合意事項の全文である。9ポイントは筆者によるコメントである。

#### 島根大学初修外国語エッセンシャルミニマムに関する合意事項

- ・エッセンシャルミニマムに島根大学初修外国語共通の枠組みを設定する。

平成17年度は各外国語ごとにエッセンシャルミニマムの策定作業を行っていた。初回ミーティングで各外国語が作成状況を報告したが、平成18年度前期に独自教科書を導入した中国語を除き、実質的作業はあまり進捗していなかった。初修外国語が選択必修科目であれば、共通枠組みの設定は避けて通れないが、他大学では、まずこの1項を合意することだけでも、おごとであろうと思われる。

- ・エッセンシャルミニマムは島根大学初修外国語教育の理念・目標を踏まえたものであること。

ミーティングで再確認した島根大学初修外国語教育の理念・目標は次の通り。

大学教育のエッセンシャルミニマムとしての初修外国語教育

日常コミュニケーション能力の習得と多次元文化の理解

広く知的訓練に寄与する自己完結した教育内容

これらはもともと、外国語教育センター設置に向けてわれわれが作成した、「『外国語教育センター』（仮称）における新しい外国語教育への提言」（『外国語教育センター』（仮称）準備委員会WG，平成15年4月）に含まれるものであるが、これまで活字化の機会がなかったので、以下に紹介しておきたい。

大学教育のエッセンシャルミニマムとしての初修外国語教育の実施。

高等教育機関としての大学の社会的存在意義は、第一義的には専門教育を通して社会に有用な人材を提供することにあるが、高等学校までの与えられた教育、特定の目標のための学習ではなく、それぞれの学生が自らの興味・関心に従い、大学でしか学べない授業の自由な履修を通して、総合的人間力の基礎作りをすることにもその意義は存在する。新しい外国語を学ぶことは、単に新たな知識や技能を得るだけにとどまるものではない。それぞれの言語の背景には、独自の世界認識の方法論と体系が広がっている。大学生という自己を客観的に意識化できる年齢に達してから初めての外国語を学ぶことは、当然そのことの意識化を伴わずには行われえない。それは今ま

での自分のものの見方を相対化する一種のカルチャー・ショックであるが、これは大学生であれば誰もが通過しなければならないイニシエーションとも言えるものである。初修外国語は大学が大学であり続けるためのエッセンシャルミニマムである。

日常コミュニケーション能力の習得と多次元文化の理解を目指す。

入門段階では従来の文法、読本に細分化された授業ではなく、言語4技能に均等に目配りした総合的授業により、バランスの取れた外国語運用能力の養成を目指す。初修外国語の限られた授業時間で英語と同等のコミュニケーション能力を身につけさせることは極めて困難であるが、日常生活のさまざまな場面で相手の言うことを理解し、自己発信できる必要最低限のコミュニケーション能力を習得させる。4年間継続して段階的に学べるカリキュラムを提供し、学部、学科等とは関係なく関心、意欲のある学生がより高度の言語運用能力を身につけられるよう指導する。英語以外の外国語を学ぶことで、世界には多様なものの見方、価値観、文化があることを理解し、多文化共生社会の一員としての自覚を涵養することを目指す。

広く知的訓練に寄与する自己完結した教育内容

人文・社会科学の限られた専門分野を除くれば、現在の初修外国語教育は専門教育のための準備段階として位置づけられるものではない。学部4年間の基礎にとどまらず、生涯教育を含めた広い意味での人生の基礎教育科目として、自己完結した教育内容が求められている。未知の言語にぶつかり、学生が自分の頭で考え、自ら問題を発見、解決し、理解するような授業が行われなければならない。その過程の中で、真の意味で「理解する」とは何かを学生自らが学ぶことが期待される。たとえ直接的関連を持たない専門分野であっても、大学に入ってから集中的に新しい語学を学ぶことは、知的訓練としてこれ以外にも多大の間接的寄与を専門教育に果たすであろう。

- ・到達目標とエッセンシャルミニマムは同じものではない。到達目標のおおよそ6割をエッセンシャルミニマムとする。

ミーティングで再確認した到達目標は次の通り。

島根大学初修外国語到達目標：各初修外国語において、4技能バランスの取れた基礎的運用能力を習得し、同時に、異文化理解及び多元的文化の理解を深めることを目標とする。運用能力の具体的到達目標としては、各初修外国語能力検定試験4級を想定する。（ミーティングでの再確認の結果、韓国・朝鮮語に関して、「韓国語能力試験1級」が想定される外国語能力試験として、その後あらたに追加された。）

あわせて、前期授業の 語（総合基礎）（ にはドイツ、フランス、中国、韓国・朝鮮が入る。以下同じ。）の授業の目的に関しても、以下の内容を再確認した。これは平成16年度以降のシラバスに明記されているものである。

読む・聴く・話す・書くという4技能のバランスのとれた 語の運用能力の基礎を身につけることが目的です。また、英語以外の外国語を学ぶことで、多元的文化の理解を目指

します。

到達目標とエッセシャルミニマムとの関係については、議論の焦点の一つであった。到達目標 = 「優」の学生が習得すべき項目、エッセシャルミニマム = 単位修得のために最低限必要な学習事項、すなわち、「可」の学生が習得すべき項目、という整理で合意が得られたことで、エッセシャルミニマムの具体化に向けての議論が一気に進んだ。

- ・エッセシャルミニマムは現行単位制度の下、学生たちが60時間の授業外学習で無理なく習得可能なものであること。

現行の単位制度の1単位は45時間の学習を前提としている。45時間の内訳は、15回の授業(30時間) + 15時間の授業外学習で、島根大学における初修外国語の必修4単位で想定されている授業外での学習時間の総計は60時間となる。

この学習時間をめぐる誤解は、往々にして教師と学生との間の不幸な行き違いの原因ともなるものである。せっかく新しい外国語を始めたのだから、せめてこれぐらいは知っていてほしいと教師は思うが、それは60時間の授業外学習には過大な要求となっている場合が多い。他方学生としては、単位数が講義科目の半分しかないのに、こんなにきつい授業はたまらない、との感想をいただくことにもなってしまう。島根大学松江キャンパスの各学部は、学生が1学期、ないしは1年間に履修、修得できる単位数に一定の上限を設けているが、それが学習時間保証の観点からなされているのであれば、単位制度の実質化はなお一層推進されるべきであろう。

- ・エッセシャルミニマム教材編 エッセシャルミニマムを踏まえた「語」独自教科書を、各外国語で作成する。エッセシャルミニマムを超える内容を含んでも良いが、何らかの形でそれを明示する。

当初よりわれわれには、抽象的項目や教育実践に反映されない理論上の数字を羅列するだけのエッセシャルミニマム作成は、全く念頭になかった。エッセシャルミニマムは学生のためにこそ作成されるべきであり、それは実際に教室で使用する教科書として具体化されなければならない。これは議論の余地なく、自明の共通理解であった。

前期週2回の授業で使用する教科書そのものが、必修4単位全体のエッセシャルミニマムであるということは、すぐには理解できないスタッフもあり、全員の共通理解となるまでには、若干の質疑応答、議論があったが、これはわれわれのカリキュラムにもふさわしいことである。

われわれのカリキュラムでは、後期の2単位は学生が自由に授業を選択できるメニュー方式の授業展開となっている。すでに前期で後期授業の単位修得のための共通基盤が形成されている、つまり、前期の教科書を完璧に習得してさえいけば、後期はどの授業を選択しても問題なく単位修得できるという前提がなければ、自由選択はシステムとしては不備なものとなってしまうからである。

- ・エッセシャルミニマム資料編 - 到達目標に対応する内容の冊子を作成し、そのおおよ

そ60%の項目をエッセンシャルミニマムとする。どの項目がエッセンシャルミニマムかを明示する。到達目標を超える内容を含んでも良いが、何らかの形でそれを明示する。名称に関しては、出来上がったものを見た上で、検討する。

こちらは到達目標に対応したものであり、外部の外国語能力検定試験合格者の単位認定での評価が「優」であることにも整合している。

- ・平成18年度に各外国語のエッセンシャルミニマムを策定し、平成19年度以後はそれを踏まえた教育内容を実施する。

上記の教材編、資料編、いずれにおいてもエッセンシャルミニマム策定は可能であり、最終的には各外国語とも両者を揃えることで合意したが、とりあえずどちらか一方を作成することになった。先にどちらに取り掛かるかは各外国語に委ねられたが、各外国語とも「語」教科書の作成から着手する旨、最終ミーティングで報告があった。また、この1項は、各外国語が結果責任を問われる非常に重い合意項目であることも確認した。

教材編、資料編に関して初修外国語共通枠組みとして確認したのは、次の通りである。

#### エッセンシャルミニマム教材編

島根大学のカリキュラムに合わせて、導入+12課構成とする。エッセンシャルミニマム資料編4と内容をリンクさせる。

中間試験、期末試験を含めて15週の授業展開に対応する構成とした。フランス語、中国語より、発音にもっと時間が必要との意見が出されたが、最初のいくつかの課の中に分散して発音を組み込む等、それぞれが独自の工夫をすることで対応は可能であり、共通の枠組みとして合意した。

#### エッセンシャルミニマム資料編

##### 言語内項目

1. 文字と発音
2. 語彙
3. 文法
4. 運用 - 英語のように技能別とはせず、場面別に整理し、その中に4技能を総合的にもりこむ。場面別整理を、具体的場面の整理とするか、機能別の整理とするかは初修外国語として統一せず、また両者が混在しても良いものとする。「場面」に関しても、当面共通の枠組みは設定しない。

##### 言語外項目

現代社会事情に限定する。

サブカテゴリーに関しては、その名称及び数、あるいはサブカテゴリーを立てるかどうかを含め、とりあえずは各外国語に委ね、今後発展的に統一を図る。

外国語科目のエッセンシャルミニマムにそもそも言語外項目を入れるかどうかは、意見の分かれたところであった。上述の島根大学初修外国語教育の理念・目標、到達目標、「語」授業の目標に照らせば、言語外項目を含まないことは、そもそもありえない選択肢であったが、易きに流れる学生気質を懸念する観点から、反対意見が述べられた。この懸念が単なる主観的

感想なのか、組織的対応を要する事柄なのかは、すでに述べた現行単位制度が前提とする学習時間の点検を経たのち判断する必要があるだろう。

項目を現代社会事情に限るとしたことに、別意見が出たが、取り上げ方を工夫して現代と関係づけることで、歴史上の事象も対象になりうることを確認した。

以上、島根大学初修外国語のエッセンシャルミニマムをめぐる取り組みについて、ごく簡単に紹介させていただいた。われわれの取り組みからエッセンシャルミニマムに関して言えるのは、エッセンシャルミニマム策定が真に教育改善のためであるのなら、それは具体的、実践的なものでなければならないということである。具体的とは、具体的数値を含むという意味ではもちろんない。学生が実際に手に取ることができ、それに則って学べる教材作成は、エッセンシャルミニマム策定作業の最終段階で求められることでもあろうが、われわれは逆にその最終段階から出発した。皮肉にもこのことは、法人化以降の効率優先の思考方法を、われわれ自身が身につけたことの証しなのかもしれない。

(西脇)

#### 4. おわりに

本稿では、「エッセンシャルミニマム」という一つのコンセプトから手探り状態で出発し、現在たどり着いている所までを記述したわけであるが、繰り返して言うと、最も大切なことは、これらをいかに教育現場で活用していくかということである。あるいは、実際に活用していけるかということである。そのためには、事後の自己点検評価は欠くことができない。そして、その際には、我々がエッセンシャルミニマムとして掲げた内容が真に学生の身についたかを検証するシステムも併せて考えていかなければならない。やりっぱなし教育は、少なくとも島根大学外国語教育センターにおける組織的外国語教育の中では認められない。

今後、まとめ上げたエッセンシャルミニマムを改めて教員スタッフ一同のコンセンサスとし、それを実現させていくための組織的 FD 活動が鍵となろう。具体的な成果については、また稿を改めて報告したい。

(廣瀬)